

「がん高度実践看護師コースAYA世代がん患者のケアとキュア」 における看護介入モデルの作成を取り入れた教育効果

有田直子¹⁾、藤田佐和²⁾、門田麻里³⁾、庄司麻美⁴⁾、森本悦子⁵⁾

(2020年9月25日受付, 2020年12月14日受理)

Educational effect of a nursing intervention model created in the “Oncology Advanced Practice Nurse Course: Care and Cure for Adolescent and Young Adult (AYA) Patients with Cancer”

Naoko Arita¹⁾, Sawa Fujita²⁾, Mari Kadota³⁾, Mami Shoji⁴⁾, Etsuko Morimoto⁵⁾

(Received : September 25, 2020, Accepted : December 14, 2020)

要 旨

「がん高度実践看護師コースAYA世代がん患者のケアとキュア」は、AYA世代がん患者に携わる専門看護師や認定看護師を対象に、AYA世代がん患者のニーズに対応することができる専門性の高い看護実践力を養成することを目的とする教育プログラムである。

本プログラムは講義（3科目）と演習（1科目）で構成した。3科目の学修を踏まえ、演習では「AYA世代がん患者の看護介入モデルの作成に向けて」の考案図を用いて事例のアセスメントを行い、患者に必要とされている看護援助を特定していくことを目標においた。

本プログラムを通して受講生は、AYA世代がん看護に特化した看護介入モデルを作成し、看護援助の方向性を考えることができた。ここでは看護介入モデルの作成を取り入れた教育効果について報告する。

キーワード：AYA世代がん、看護介入モデル、高度実践看護師、教育効果

Abstract

The “Oncology Advanced Practice Nurse Course: Care and Cure for Adolescent and Young Adult (AYA) Patients with Cancer” is intended for certified nurse specialists and certified nurses who provide care to AYA patients with cancer, and aims to cultivate highly specialized practical nursing skills that enable them to address patient needs.

This program consisted of lectures covering three topics and one exercise session. Based on what they learned in the lectures (three topics), participants engaged in an exercise aimed at identifying necessary nursing support for patients, and assessed cases according to the “framework for creating a nursing intervention model for AYA cancer patients” developed by course lecturers.

Through this program, participants were able to create a nursing intervention model focused on oncology nursing for AYA patients, and consider the direction of nursing support. This report describes the educational effect of the creation of the nursing intervention model.

Key words: adolescent and young adult with cancer, nursing intervention model, Advanced Practice Nurse (APN), educational effects

¹⁾ 高知県立大学看護学部看護学科 講師

Department of Nursing, Faculty of Nursing, University of Kochi, Lecturer

²⁾ 高知県立大学看護学部看護学科 教授

Department of Nursing, Faculty of Nursing, University of Kochi, Professor

³⁾ 高知県立大学看護学部看護学科 特任助教

Department of Nursing, Faculty of Nursing, University of Kochi, Project Assistant Professor

⁴⁾ 高知県立大学看護学部看護学科 助教

Department of Nursing, Faculty of Nursing, University of Kochi, Assistant Professor

⁵⁾ 高知県立大学看護学部看護学科 教授

Department of Nursing, Faculty of Nursing, University of Kochi, Professor

I. はじめに

本学は、文部科学省平成29年度 多様な新ニーズに対応する「がん専門医療人材(がんプロフェッショナル、以下がんプロ)」養成プランに採択にされ、中国・四国の11大学による「全人的医療を行う高度がん専門医療人養成」事業による教育を行っている。本事業は、ライフステージやがんの特性を考慮して、がんとともに生きる人とその家族の健康と生活に関わるニーズに応えられる専門性の高い実践ができる看護師の養成を目的としている。令和元年度は、「AYA世代がん患者のケアとキュア」をテーマに、AYA世代のがん患者のケアに携わる専門看護師や認定看護師を対象に、本学がんプロメンバーでプログラムを開発し、教育コース（リカレント教育）を実施した。

AYA (Adolescent and Young Adult) 世代とは、思春期・若年成人期であり、日本では、15-39歳の広い年齢層を指すことが多く、政策を考える上で、40歳以降は介護保険等の公費負担制度があるが、制度の側面から医療が行き届いていないと考えられる年齢層である（厚生労働省，2018）。平成27～29年度厚生労働科学研究費補助金（がん対策推進総合研究事業）「総合的な思春期・若年成人（AYA）世代のがん対策のあり方に関する研究」では、国内のAYA世代のがんの実態と課題が明らかにされた。AYA世代に発症するがんにおいては、診療体制は定まっておらず小児と成人領域の狭間であるため患者が適切な治療を受けられないおそれがあること、他の世代に比べ患者数が少ないため、医療者に、診療や相談支援の経験が蓄積されにくいこと等が取り上げられている。このような現状・課題から、がん対策推進基本計画（平成30年3月）においては、第3期がん対策推進基本計画の重点施策として「AYA世代のがん」が加わり、AYA世代がん患者の医療と支援の推進のため取り組むべき施策が出された（厚生労働省，2018）。

AYA世代は、エリクソンの自我発達理論によれば、第V段階思春期・青年期（12～22歳）、第VI

段階前成人期（23歳～）、第VII段階成人期（30歳～）であり、10代、20代、30代で悩みや課題も異なる幅広い年代である。そのためAYA世代には、就業・就労・結婚・出産などの多岐にわたるライフイベントがあり、発達に応じた課題や病気の課題など多重で多様な移行の体験をしているひとへのケアが求められている。

このような状況を踏まえ、本プログラムではAYA世代がん患者に携わる看護師が、AYA世代がん患者のニーズに対応することができる専門性の高い看護実践力を培うため、AYA世代がんの診断や治療に関する知識、AYA世代がん患者への看護実践の基盤となる諸理論、AYA世代がん看護に関する専門的な知識と技術を学び、それらに基づく専門性の高い統合的アプローチを修得することを目指した。その結果、本プログラムを通して受講生は、AYA世代がん患者の看護介入モデルを作成することができ、AYA世代がん看護に特化した看護援助の方向性を考えることができた。

本稿では、令和元年度「高知県立大学がん高度実践看護師コースAYA世代がん患者のケアとキュア」の実施内容と、「AYA世代がん患者の看護介入モデルの作成に向けて」の図を考案し、看護介入モデルの作成において取り入れたことによる教育効果について報告する。

II. 「高知県立大学がん高度実践看護師コースAYA世代がん患者のケアとキュア」の概要

1. 教育目的・目標

1) 教育目的

本教育コースは、すでに実践で活躍しているAYA世代がんの患者のケアに携わる専門看護師や認定看護師を対象に、AYA世代がん患者のニーズに対応できる高度な実践能力を養成することを目的とした。AYA世代がん看護における看護師の高度な実践能力とは、理論や知識を実践に有用に活用する専門性の高い統合的アプローチを行う能力であると考え、これらの能力を培うための授業科目を検討し4科目60時間（8日間）で構成した。

2) 教育目標

授業科目は「AYA世代がん看護基盤論」「AYA世代がん診断治療学」「AYA世代がん看護実践論」「AYA世代がん看護展開論」の4科目で構成し、科目ごとに教育の達成目標を設定した。授業科目ごとの教育の達成目標について表1に示した。

2. 授業科目の概要

本プログラムは講義と演習で構成され、4単位60時間（8日間）の履修を必要とする。授業科目・時間数と授業概要について表1に示した。プログラムで定める60時間のうち、各科目8割以上履修することを修了要件とし、令和元年度の受講者は15名、うち10名が修了した。

Ⅲ. プログラムの実施内容とAYA世代がん看護介入モデルの考案

1. 授業の展開

本プログラムは、「AYA世代がん看護基盤論」「AYA世代がん診断治療学」「AYA世代がん看護実践論」の3科目の学修を踏まえて、「AYA世代がん看護展開論」において演習を行った。演習では、事例のアセスメントを行い、AYA世代の特有の課題を統合させ、看護問題や重要な課題、必要としている看護介入を特定していくことができるよう看護介入モデルを作成することを目標においた。「AYA世代がん看護基盤論」「AYA世代がん診断治療学」「AYA世代がん看護実践論」のそれぞれの授業科目においては、専門的知識を養うため、がんプロプロジェクトメンバーである学内教員による授業の実施のほか、臨床でAYA世代がんの治療やケアに携わっている医師や社会福祉士、がん看護専門看護師に講義を依頼した。

「AYA世代がん看護基盤論」「AYA世代がん診断治療学」「AYA世代がん看護実践論」の3科目で学んだ知識や理論や概念の活用により修得した包括的アプローチを、「AYA世代がん看護展開論」の科目において統合することができるよう授業を展開した。「AYA世代がん看護展開論」では、が

んプロメンバーにより、「AYA世代がん患者の看護介入モデルの作成に向けて」の図を考案し（図1）、受講生はこれを活用して事例分析を行った。受講生は小児領域から成人領域など幅広い専門領域の専門看護師や認定看護師であり、複雑なケアの課題がある患者への実践を経験していた。そのため授業で展開する事例は、受講生の背景を考慮し10代から30代のAYA世代の事例を作成し提供した。また演習では、受講生が作成した事例の中から、がんプロメンバーで4事例を選択し、分析を行えるようにした。

2. 「AYA世代がん看護展開論」における「看護介入モデルの作成に向けて」の考案図を用いた事例分析と看護介入モデルの作成

1) 「AYA世代がん看護展開論」において事例分析を行うための導入講義

「AYA世代がん看護展開論」を行うにあたり、事例分析から看護介入モデルの作成に取り組めるように、受講生に導入の講義を行った。受講生が、「AYA世代がん看護基盤論」「AYA世代がん診断治療学」「AYA世代がん看護実践論」の3科目を踏まえ、グループワークにて看護介入モデルを作成していくプロセスを辿れるよう、導入講義には以下の①～⑤の内容を含めた。①「AYA世代がん看護基盤論」「AYA世代がん診断治療学」「AYA世代がん看護実践論」で修得した知識は、看護介入を考えるうえで重要であると位置づけ、分析を行う際には今までの学修を想起し、振り返りながらディスカッションを行うこと、②専門看護師、認定看護師であるため学んだ理論や概念、AYA世代特有の課題を統合させてアセスメントを行う力が求められていること、③理論や概念、AYA世代特有の課題を統合させたアセスメントは患者にとって必要な看護介入を特定していくことにつながる、④事例によって適している理論や概念は異なり、選択した理論、概念を軸としてアセスメントを行うこと、⑤理論や概念は複数選択し、統合させてアセスメントを行い看護介入モデルを

表1. 教育プログラムの概要

授業科目名・時間数		
教育の達成目標	授業概要	
1. AYA 世代がん看護基盤論 1 単位 15 時間		
① AYA 世代の身体的、心理的かつ社会的な特徴を理解する。	AYA 世代の身体的、心理的かつ社会的な特徴を理解するとともに、A 世代と YA 世代で異なる発達課題や性や生殖機能など世代特有の課題を踏まえ、AYA 世代がん患者への看護実践の基盤となる諸理論と、AYA 世代の権利擁護および倫理的思考について学修する。 ・ AYA 世代がん患者の看護における諸理論 ・ AYA 世代の発達段階による特徴や課題 ・ AYA 世代がん患者への看護にまつわる倫理的課題とアプローチの実際 ・ 複雑な健康問題(治療による晩期合併症、二次がんなど)をもつ AYA 世代がん患者への包括的アセスメントとケア ・ AYA 世代がん患者への看護における課題と戦略(成人医療への移行の問題・長期フォローアップなど継続した看護を含む)	
② AYA 世代がん患者への看護の基盤となる諸理論、ならびにその活用法について理解する。		
③ AYA 世代の権利擁護について理解し、倫理的思考に基づく看護の役割について説明できる(AYA 世代を取り巻く医療環境が抱える課題と戦略)。		
2. AYA 世代がん診断治療学 1 単位 15 時間		
① AYA 世代特有の諸問題を医学的な観点から理解する。	AYA 世代がん患者の特徴を踏まえたがん治療および診断の実際について理解し、高度実践看護師として、エビデンスに基づいて AYA 世代がん患者への看護のアプローチを提供する能力を獲得する。希少で多種多様ながん腫からなる AYA 世代がんに関わる診断、治療および、晩期合併症など治療後の長期的・継続的な診療についての理解を深め、看護実践について考察する。 ・ AYA 世代がん(白血病)の治療の現状と課題 ・ AYA 世代がん(白血病)の診断、治療法 ・ AYA 世代がん(骨肉腫)の治療の現状と課題 ・ AYA 世代がん(骨肉腫)の診断、治療法 ・ AYA 世代がん(遺伝性腫瘍・ゲノム医療)の治療の現状と課題 ・ AYA 世代がんの診断、治療法(診断治療と妊孕性、生殖機能等の問題を含む) ・ 治療期にある AYA 世代がん患者への看護実践(妊孕性、生殖機能の問題やライフスタイルと機能回復について含む) ・ AYA 世代がん患者への緩和医療とチーム医療(多職種連携) ・ AYA 世代がん患者への支援(社会福祉士による支援)	
② AYA 世代がんの診断・治療のプロセス、晩期合併症などを理解し、AYA 世代特有の治療に伴う支援について説明できる。		
③ AYA 世代がん患者の治療過程における看護援助について説明できる。		
3. AYA 世代がん看護実践論 1 単位 15 時間		
① AYA 世代の特徴を踏まえ、AYA 世代がん患者と家族を包括的にアセスメントできる。		AYA 世代の身体的、心理的かつ社会的な特徴および AYA 世代がんの病態を理解し、A 世代と YA 世代で異なる発達課題を踏まえた意思決定支援や患者の将来を見通した、生活の質向上を目指す高度な看護実践に応用するための基盤を学修する。 ・ AYA 世代がん患者の全人的アセスメントと看護援助: 身体的側面 ・ AYA 世代がん患者の全人的アセスメントと看護援助: 心理社会的側面(精神的ストレス、結婚の問題、ピアサポート、アピアランスケア含む) ・ AYA 世代がん患者の家族への看護援助(子ども、両親、同胞への支援) ・ AYA 世代がん患者と家族の意思決定支援 ・ AYA 世代がん患者の療養生活を支援する看護実践Ⅰ(外来看護、復学・進学・就業支援) ・ AYA 世代がん患者の療養生活を支援する看護実践Ⅱ(在宅緩和) ・ AYA 世代がん患者のエンド・オブ・ライフケア
② AYA 世代がん患者の家族の特徴を理解し、意思決定支援を含めた看護援助を提案することができる。		
③ AYA 世代特有の患者の就学、就労、性や生殖機能に関する課題や社会的な支援・施策を理解し、質の高い生活を支援する方策を考案できる。		
4. AYA 世代がん看護展開論 1 単位 15 時間		
① AYA 世代がん患者の治療及び課題の特性を踏まえた看護援助を考案できる。	科目 1～3 の学修を踏まえて、高度な看護実践を展開できる能力を獲得し、AYA 世代がん患者への看護介入モデルを考案する。 ・ 複雑な課題を抱える AYA 世代がん患者への看護介入モデルの作成	
② AYA 世代がん患者と家族の意思決定を支える看護について説明できる。		
③ 複雑な課題を抱える AYA 世代がん患者に対して、既習した理論を活用した看護介入モデルを考案できる。		

作成していくこと、を伝えた。また各グループは、事例の提供者を含んだ3人～4人で構成し、事例を提供した受講生に質問しながら、事例の理解と分析を深めることができるようにした。

2) 「AYA世代がん看護展開論」の演習目標と展開 (1) 目標

- ①今までの学修を踏まえ、講師が提案した「AYA世代がん患者の看護介入モデル作成に向けて」の考案図（図1）を活用して、適した理論と概念を選択し、複雑な課題を抱えるAYA世代がん患者の包括的なアセスメントを行うことができる。
- ②さまざまな年代のAYA世代がん患者の包括的なアセスメントから、事例に特定した必要な看護介入を見だし、看護介入モデルを作成することができる。

(2) 看護介入モデルの作成に向けた演習の展開 提案した「AYA世代がん患者の看護介入モデル

作成に向けて」の考案図（図1）を活用し、グループで事例分析を行った。受講生は4グループに分かれ、2日間（13時間）にわたって演習を行った。本学がんプロメンバーの教員であるがん看護学領域の教員や、がん看護専門看護師など5名がそれぞれのグループを担当し、受講生が行う事例分析のファシリテーターを務めた。演習は以下の①～⑤の段階を踏んで進められた。

①事例の理解を深める。

今まで学んだ知識を視点としながら、「この診断・治療に特有な課題は？」「診断後の治療経過とフィジカルアセスメント、身体的側面は？」「サバイバーシップのどの時期？」「この事例はAYA世代特有のどんな課題があるのだろうか？」「今までどんな発達課題に取り組み現在どんな発達課題がある？これからどんなことに取り組んでいくのか？」「家族としてはどのような発達段階にある？」などの内容をお互いに質問し合う。また

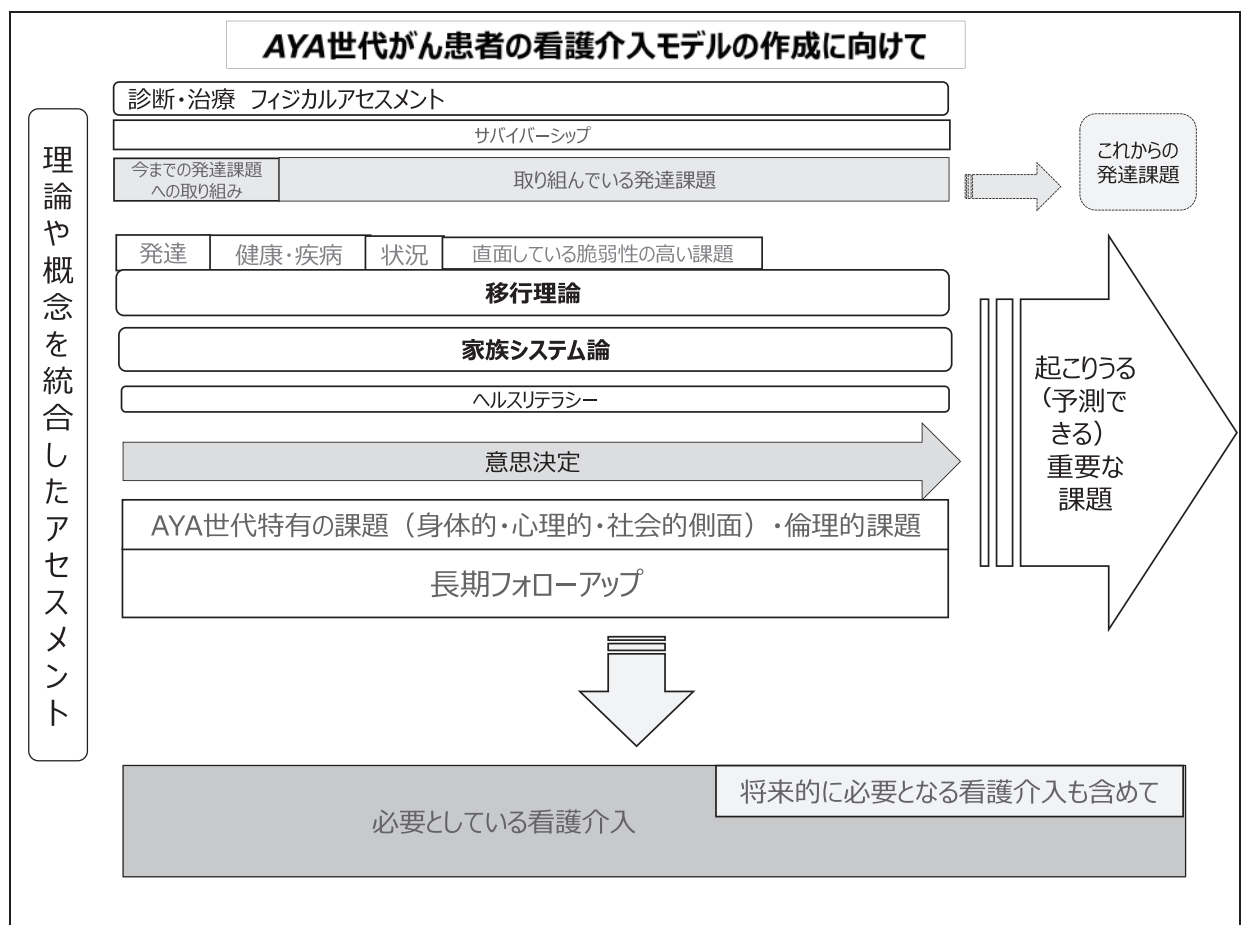


図1. 「AYA世代がん患者の看護介入モデル作成に向けて」の考案図

事例を提供した受講生に確認し深めていく。

②グループで看護介入モデルを作成する上で事例に適した理論や概念を選択する。

事例を深める過程で、事例に焦点が当たっている課題から適した理論、概念を選択する。選択した理論や概念について、各グループでどのような検討を行い決定したのかを発表し合う時間を持ち、グループ間で共有する。

③「AYA世代がん患者の看護介入モデル作成に向けて」の考案図（図1）を用いて講師が展開例を示す。

事例分析が進んだところで、講師がグループで話し合われた内容を取り上げながら、「AYA世代がん患者の看護介入モデル作成に向けて」の考案図（図1）を用いて、看護介入モデルを作成していく展開例を提示し、受講生に説明を行う。受講生は提示された看護介入モデルを参考に、各グループで看護介入モデル作成に向けた検討を進める。

④作成した看護介入モデルを発表する。

講師がファシリテーターとなり、各グループが作成した看護介入モデルを発表し、受講生でディスカッションを行う。

⑤グループを担当した講師よりフィードバックを行う。

3. 受講生の学びと授業評価

本プログラムの特徴は、「AYA世代がん看護基盤論」「AYA世代がん診断治療学」「AYA世代がん看護実践論」の3科目で学んだ知識や理論、概念の活用により修得した統合的アプローチを、「AYA世代がん看護展開論」の科目において統合させることである。統合する過程において考案した「AYA世代がん患者の看護介入モデルの作成に向けて」の考案図（図1）を活用して、事例分析を行い、看護介入モデルを作成していくことで、教育の目標を達成できるような授業内容とした。

研修後、受講生による「AYA世代がん看護展開論」の目標①～③の達成度についての評価の自由

記載の部分を抜粋し、整理した。またコース全体の授業評価についても自由記載内容をまとめた（表2）。なお、研修のオリエンテーション時に、本プログラムの成果は誌上報告等に用いることがある旨を説明し、承諾を得ている。

プログラムの受講生の全科目を通しての授業評価として、「満足度」は、大変満足した93%、まあまあ満足した7%、「専門性の高い看護実践力の修得につながったか」に対しては、十分つながった79%、ある程度つながった21%であった。また、「今回のコースの内容は今後のがん患者への専門性の高い看護実践に活用できるか」に対しては、大変活用できる93%、まあまあ活用できる7%であった。本プログラムでは、AYA世代のがん患者の高度な看護実践を行う上では、「AYA世代がん看護基盤論」、「AYA世代がん診断治療学」、「AYA世代がん看護実践論」の3科目で学んだ知識や理論を統合させ、必要としている看護介入を特定していくことができるよう看護介入モデルを作成することを目標としていることが特徴である。受講生は「AYA世代がん看護展開論」で行ったグループワークでの事例分析を通して、学んだ知識や理論を統合させて、看護介入について検討ができたという内容を記載していた（表2）。受講生は専門看護師や認定看護師であり、専門的知識を発展させていくために、主体的な学びを行う意欲と能力を高く持っている看護専門職者である。コース全体の意見として、「先輩CNSから今回の課題だけではなく日頃の活動の実際についても教えていただき学びが多かった」「他施設のCN・CNSと一緒に学んでいくなかで交流を深めることができた」「講師や研修生とのディスカッションが有意義で学びを深め今後のエネルギーになった」があげられた。

表2. 受講者によるAYA世代がん看護展開論の目標達成についての評価とコース全体の授業評価

教育の 達成目標	①AYA 世代がん患者の治療及び課題の特性を踏まえた看護援助を考案できる ②AYA 世代がん患者と家族の意思決定を支える看護について説明できる ③複雑な課題を抱える AYA 世代がん患者に対して、既習した理論を活用した看護介入モデルを考案できる
達成目標における評価	
<p>目標①について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・思春期の子どもの生活について将来を見据えた視点で考えることができた ・事例を通して AYA 世代のがん患者の特性や家族の置かれている状況を考え具体的援助を考えることができた ・理論や概念を軸として現象を捉えることやグループワークでの意見を通して視野が広がり学びが深まった <p>目標②について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・倫理的な視点で AYA 世代の人にとっての意思決定が今とその先にどのように影響するのかを考えることができた ・SDM(Shared Decision Making)を活用した倫理的な意思決定と AYA 世代特有の移行を意識したい ・発達課題や家族システムに応じた意思決定支援について学ぶことができた <p>目標③について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・事例を振り返りながら移行理論、家族システム理論、発達課題、意思決定を統合して考えていくことができた ・理論は情報を整理しアセスメントする上で重要で使い方を学べたのはよかった ・グループメンバーの知識や経験を基にして理論の活用を話し合うことができた ・事例を通して理論を活用する意味、重要性は理解できたが「考案できる」には至っていない <p>看護展開論の授業全体に対する意見</p> <ul style="list-style-type: none"> ・理論を統合してアセスメントするということがイメージできなかったが2日間のグループワークを通して理論の活用の仕方を理解できた ・アセスメントの深さが看護ケアの質につながるような気がして楽しんで学ぶことができた ・理論の講義とグループワークでの統合まで数か月空いたがグループ担当教員から知識面の補いがあり進められた 	
コース全体の授業評価	
<p>今後 AYA 世代がん患者の専門性の高い看護実践に活用できると思う内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・AYA 世代の方の問題は複雑で関わりに悩むことが多いため理論や概念の活用でどこに介入すればその人らしい生活を支援できるのかを考えていくことができる ・発達段階や移行などの様々な視点で現象を整理することで先を予測したケアを行うことができる ・看護介入モデルに取り組むグループワークは知識体系の活用や統合する力を高めるためにとても役に立つ 	

IV. 考察

1. 看護介入モデルの作成を取り入れたことによる教育効果

AYA世代のがんは、小児に多いがんが発生すること、成人と異なる性質を持つこと、肉腫、胚細胞腫瘍、脳腫瘍などの希少がんの罹患が多いため、治療や看護ケアについての情報も非常に少ない現状にある（堀部，2018）。また、AYA世代の人はがんを体験することにより、生活の中で様々な中断や崩壊が起こり、その混乱は深刻であり、重大であることも多い（Nass, et al., 2015）。看護師は、心理社会的状況も様々である個々の

AYA世代のがん患者の状況に応じた多様なニーズに対応することが必要であるが、標準化されたケアはなく一人ひとりに合った看護を実践していくことが求められている。AYA世代のがん患者の体験を、ダイナミックに捉えていく能力が、看護師には必要とされていると言える。このようなAYA世代のがん患者のケアの課題に対応できる専門性の高い統合的アプローチを修得できるよう、「AYA世代がん看護基盤論」「AYA世代がん診断治療学」「AYA世代がん看護実践論」3科目の学修を、「AYA世代がん看護展開論」で統合することを目指した。3科目45時間（6日間）の多

岐にわたる専門的分野の学修を、「AYA世代がん看護展開論」で統合するためには、理論や概念、知識を想起しながら個人に特定したケアを導いていくことができるよう、体系的に考える枠組みが必要であると考え、「AYA世代がん患者の看護介入モデル作成に向けて」の考案図を提案した。

「AYA世代がん看護展開論」における受講生の評価では、「理論や概念を軸として現象を捉えることやグループワークでの意見を通して視野が広がり学びが深まった」「事例を振り返りながら移行理論、家族システム理論、発達課題、意思決定を統合して考えていくことができた」「理論を統合してアセスメントするということがイメージでできなかったが2日間のグループワークを通して理論の活用の仕方を理解できた」等があった。この考案図に沿って事例分析を行うことにより、受講生はAYA世代がん患者の包括的なアセスメントを行い、事例に特定した必要な看護介入を見だし、看護介入モデルを作成することができたと考えられた。本プログラムは専門看護師や認定看護師を対象とした研修であり、AYA世代がん患者のニーズに対応することを可能とする専門性の高い看護実践力を培うことを目的としている。専門看護師や認定看護師は、エキスパートな実践を行う能力を有している実践家である。達人(Expert)の実践家は、豊富な経験をもち、状況をまるごとつかみ、過去の具体的な状況をパラダイムとして使い、実践の全体状況を深く理解したうえで働く能力がある(Benner, 1984/1992)。またエキスパートの臨床の知識は、基本概念の印象、倫理的価値、病気の進行予測、治療の情報など複雑な項目が織りなすネットワークから成り立っていると言われている(Hamric, et al., 2014/2017)。受講生にとって、「AYA世代がん患者の看護介入モデル作成に向けて」の考案図は、事例の状況の全体を掴みアセスメントを行い、最も重要な看護介入を特定していくうえで、俯瞰的に、系統的に思考する手がかりになっていたと考えられた。

また受講生は、「グループメンバーの知識や経

験を基にして理論の活用を話し合うことができた」と評価していた。高度実践看護師の専門的知識は、学部教育や生涯学習、臨床経験、指導された事柄、同僚との間の情報交換など、さまざまな源から生まれ、これらの知識を統合することで、高度な臨床実践に関連させることができると考えられている(Hamric, et al., 2014/2017)。「AYA世代がん患者の看護介入モデル作成に向けて」の考案図を基に、エキスパート同士で行うディスカッションが、事例に特定された看護介入を導き出し、看護介入モデルの完成につながっていたと考えられた。高度実践看護を行うエキスパートは、迅速に状況を飲み込む能力を備えており、重要な確かな情報を確認することができ、患者にレッテルを貼らず可能な限り客観性のあるケアを保証する(Hamric, et al., 2014/2017) 力がある実践家である。受講生は、看護介入モデルを用いてグループメンバーと活発にコミュニケーションを図ることで、普段は言語化されていない卓越したアセスメント能力を可視化し、自己効力感を高めながら演習を展開していたと考えられた。また、この研修に参加したものの同士の相互作用が、本プログラムへの高い満足度にもつながったと考えられた。

2. プログラム構成の評価と今後の課題

本プログラムは、「AYA世代がん看護基盤論」「AYA世代がん診断治療学」「AYA世代がん看護実践論」の3科目で学んだ知識や理論や概念の活用により修得した統合的アプローチを、「AYA世代がん看護展開論」の科目において、統合する構成としている。統合するにあたっては、「AYA世代がん患者の看護介入モデルの作成に向けて」の考案図を活用して事例分析を行い、看護介入モデルを作成していくことで、教育目標を達成できる授業内容とした。受講生はAYA世代がん患者の診療、看護、福祉等、様々な状況にかかわる専門職者の講師から3科目を学び、それらを基盤とすることで「AYA世代がん看護展開論」を効果的に学修できたと考える。また複雑な課題や多様な

ニーズがあるAYA世代がん患者においては、意思決定支援を展開する能力が看護師には求められると考えられた。そのため、「AYA世代がん看護実践論」の目標②では、「AYA世代がん患者の家族の特徴を理解し、意思決定支援を含めた看護援助を提案することができる」をあげた。加えて「AYA世代のがん看護展開論」の目標②で「AYA世代がん患者と家族の意思決定を支える看護について説明できる」をあげ、「AYA世代がん患者の看護介入モデルの作成に向けて」の考案図には、AYA世代にある人の意思決定支援を検討できるよう示した。AYA世代のがん患者においては、妊孕性温存、ボディイメージの変化への対応、治験登録（標準治療が確立していない治療）等、特有の課題に対する意思決定に取り組んでいることがあげられている（Miano, 2016）。受講生の評価においても、「倫理的な視点でAYA世代の人にとっての意思決定が今とその先にどのように影響するのかを考えることができた」「SDM（Shared Decision Making）を活用した倫理的意思決定とAYA世代特有の移行を意識したい」などがあげられており、最終ゴールとして意思決定支援を考えることができるプログラムになっていたと考えられた。

コース全体の受講生の授業評価としては、「満足度」は高く、「専門性の高い看護実践力の修得」については、8割近くが十分つながったと評価し、「今後のがん患者への専門性の高い看護実践への活用」に対して、約9割が大変活用できると答えていた。これらの結果から、受講生は本コースの目標を達成したと評価することができ、本プログラムは受講生のニーズに合致した教育コース（リカレント教育）の企画となっていたと考える。

また受講生は、「AYA世代がん看護展開論」の授業全体に対して、「アセスメントの深さが看護ケアの質につながるような気がして楽しんで学ぶことができた」とあげていた一方で、「事例を通して理論を活用する意味、重要性は理解できたが考案できるには至っていない」と、評価をしていた。

今後はさらに「看護介入モデルを考案できる」ことを目指すアドバンス編のプログラムを検討していくことも必要であると考ええる。

V. おわりに

本学はがんプロ連携大学として、平成24年度よりプログラムを実施（藤田他, 2014）し、PDCAサイクルによる取り組みで研修内容の洗練化を行ってきた実績がある（森本他, 2017）。本プログラムの企画立案、授業内容の構成、実施過程においては、がんプロメンバーで、今までの取り組みをいかした検討・評価を行い、受講生が「AYA世代がん看護展開論」で3科目の学修の統合が行えるよう演習内容を構成した。今後は、今回のプログラムの実施と評価を踏まえ、高度実践看護師を対象とする教育プログラムの開発を継続して探究することを目指したい。

引用文献

- Benner P. (1984)／井部俊子, 井村真澄, 上泉和子訳 (1992). ベナー看護論 達人ナースの卓越性とパワー, 2-3, 22-25, 医学書院, 東京.
- 藤田佐和, 弘末美佐, 廣川恵子他 (2014). 「質の高い在宅がん看護実践を創造していく看護師養成プログラム」の教育効果と課題. 高知県立大学紀要看護学部編, 63, 51-63.
- Hamric A.B., Hanson, C.M., Tracy, M.F., et.al (2014)／中村美鈴, 江川幸二 監訳 (2017). 高度実践看護—統合的アプローチ, 155-156, へるす出版, 東京.
- 堀部敬三 (2018)／AYAがんの特徴. 平成27～29年度厚生労働科学研究費補助金（がん対策推進総合研究事業）「総合的な思春期・若年成人（AYA）世代のがん対策のあり方に関する研究」班編. 医療従事者が知っておきたいAYA世代がんサポートガイド, 2-6, 金原出版, 東京.
- 厚生労働省, がん対策推進基本計画 (2018). がん対策推進基本計画（第3期）〈平成30年3月〉／2020年10月24日アクセス

<https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000183313.html>

Miano SJ. (2016). Shared Decision Making in Adolescents and Young Adults With Cancer. *Oncology Nursing News*. October 18. <https://www.oncnursingnews.com/publications/oncology-nurse/2016/october-2016/shared-decision-making-in-adolescents-and-young-adults-with-cancer>

森本悦子, 橋本理恵子, 藤田佐和他 (2017). 「質の高い在宅がん看護実践を創造していく看護師養成プログラム」の活動報告—4年間の実施概要とプログラム洗練化の取り組み—. 高知県立大学紀要看護学部編, 66, 35-42.

Nass SJ., Beupin LK., Demark-Wahnefried D., et al. (2015). Identifying and Addressing the Needs of Adolescents and Young Adults With Cancer: Summary of an Institute of Medicine Workshop. *The Oncologist*. 20 (2), 186-195. doi : 10.16.4/theoncologist. 2014-0265